角川文庫
—2489—

幽霊

—或る幼年と青春の物語—

北杜夫

角川書店

昭和四十三年二月二十日　初版発行
昭和五十三年七月二十日　二十三版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

幽霊

著作者　北杜夫
発行者　角川春樹
印刷者　橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三　株式会社角川書店
郵一〇二　振東京③一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　新興印刷・本間製本
0193-127103-0946(3)

幽　　霊

—或る幼年と青春の物語—

北　杜　夫

第一章

人はなぜ追憶を語るのだろうか。

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。――だが、あのおぼろな昔に人の心にしのびこみ、そっと爪跡を残していった事柄を、人は知らず知らず、くる年もくる年も反芻しつづけているものらしい。そうした所作は死ぬまでいつまでも続いてゆくことだろう。それにしても、人はそんな反芻をまったく無意識につづけながら、なぜかふっと目ざめることがある。わけもなく桑の葉に穴をあけている蚕が、自分の咀嚼するかすかな音に気づいて、不安げに首をもたげてみるようなものだ。そんなとき、蚕はどんな気持がするのだろうか。

＊

母は少女のころ、外国で生活していたひとであった。なぜ父と一緒になったのかをぼくは知らない。

……彼女の部屋にはおおきな鏡があった。それは唐紙一枚ほどの大きさだったが、硝子のおもてがしんと澄んでいて、彫刻をほどこした木縁もくろずんだ光沢をはなち、とても日本間には似つかないものであった。嵌めこむ場所がないので一方の壁に立てかけられている大鏡は、なんだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かつめたい渋面をつくって、部屋の調度をこと細かに調べつくしているようだった。

母はその鏡の機嫌をとりたかったのだろう、能うかぎり入念に部屋のなかを洋風にしつらえた。畳がすっかり隠れるようにねずみ色の絨毯を敷きつめ、衣裳箪笥だのベッドだのをよい塩梅に位置させた。幼い眼にはお伽話めいた華麗さが室内を満たしていた。柔かいのや、厚ぼったいのや、袖に襞のついたのや、彩りゆたかなさまざまの衣裳がなにげなく椅子のうえに投げかけられていて、一方の壁はゴブラン織りで覆われ、そのほかおびただしい布地が使われて、粗末なもの陳腐なものを隠していた。

幼いぼくにとってその部屋がたいへん気に入ったのは、単なる好奇心というよりも、なにか異質的なものへのあこがれ、肌になじめないものへの愛着であったにちがいない。たとえばどっしりしたマホガニーの化粧台にしても、まだ柔かなたましいを魅する複雑な陰翳をふくんでいた。抽斗のなかのブラッシにしてもピンやマニキュアの道具にしても、少年時代に森のなかで見出した珍奇な虫とか茸とかのように、我を忘れさせるほどの驚嘆をもたらしてくれた。並んでいるロード・ポー、ローション、香水などの小びんも物珍しかったし、たちこめた甘ったるい匂いは身体をすくめねばならぬほどこそばゆかった。なかでも可愛いゴム球のついたカットグラスの香水吹きなどは、できることだったらぼくもひとつ持っていたかったほどだ。ぼくは両手で香水吹きをつかみ、その緻密に鋭利な光沢に見入っては、よく刻のながれるのを忘れたものだ。しかしそんなとき、ふと傍らからぼくの動作を見つめている大鏡の、ひややかな表情に気づくことがあった。すると、ほんの一瞬だがぼくはぎくりとし、そのまま逃げだしてしまいたい衝動にかられた。

だが、じきにそんな臆病なこころは消えてゆき、あの鏡のなかに、なにかの拍子でほかの人の顔なり姿なりがひょっこり現われやしないかなどと、淡いためらいがちな期待さえいだいたりした。

ぼくはなにかわからぬが、ある種の形に興味をもっていた。だからぼくは、よく絨毯のうえにかがみこんで、そこに白く染めぬいてある模様について考えてみた。枝葉のようなかたちもあった。いろいろな身ぶりをした人のかたちもあった。それでいて少し離れて眺めると、枝葉や人の姿が寄りあつまって、ひとつの顔を形造っているように思われた。それは壁掛にあるスフィンクスの顔のようでもあったが、どうかした拍子に視線が狂うと、もう顔は消えてしまって、つまらない混みあった模様がばらばらに見えるばかりなのだ。ぼくはながいこと絨毯と睨めっこをしては、その変幻に富む顔をとっくりと見極めようとした。しかし結局なんのことやら曖昧になって、そのたびに瞞されたような、欺かれたような失望に囚われるのだった。

「あの顔は、なに？」

一度だけ母にそう尋ねてみたことがある。ほんのなにげなく言ったつもりだったが、声はばかにせきこんだふうに喉からとびでてしまった。

「顔って、どれ？　これは鳥でしょう？　そして、これは木の葉。顔なんてどこにもないでしょう」

そう言われてみると、顔は消えてしまったようだった。そればかりか、今まで人のかたちとばかり信じていた模様まで、たしかに鳥に見えてきた。ぼくには母が魔法を使ったとしか考えられなかった。目をあげると、ほほえんでいる母の際だって白い額のあたりが、妙に見知らぬひとの

ように見えた。ぼくはうつむいて手で絨毯を撫でた。生物の毛にさわったような感じがした……。

父は学者というものらしかった。ながい間、この世のことがいくらかわかってくるまでぼくはただそう信じていた。

いま考えてみれば、父はひとりの秀でたディレッタントであったようだ。生れつき創造ということの尊厳と陋劣とを知りつくしていて、もうひとつの凡庸な平明な世界への憧憬が、どの方面へも彼を深入りさせなかったのかも知れない。とにかく彼がつめたく酔いながらあとに遺したものは、紀行と随筆の本が数冊と、ちいさな青表紙の詩集が一冊だけである。美術評論家とか随筆家とか記されるのはまだしも、旅行家などと註されたことまであった。

ぼくがほんの幼いころから頭髪は白くなりかけていて、書きものをするときにだけ、角ばった縁なしの眼鏡をかけていた。父はよくその眼鏡をどこかに置きわすれ、そのたびに家じゅうが大騒ぎをした。母はもちろん、女中や婆やまでが呼びあつめられて、部屋から部屋をせかせかと歩きまわるのだった。そのさまは捜しものをするためでなく、せかせか歩きまわるためにのみ動いているように見えた。ぼくはそんな人たちのあとを追って一緒に歩きまわりながら、じきに壁にできた汚染とか廊下にさしている庭樹の影とかに気をとられ、当の捜しものを忘れてしまうことが多かった。そのうちに眼鏡は茶簞笥のうえだの、座蒲団のかげだの、ときには後架のなかから見いだされるのだったが、父はそのたびに「ほう」と嘆声を発し、ひどく不機嫌になってそれを受けとったものだ。みんなは思い思いの笑いを頬に刻み、なかでも婆やは、無理に笑いを歯のか

けた口のなかにおしこめようとして苦しげにむせかえった。

父はほとんど口をきかない人であった。ときたま父の声をきくと、なんだか初めてきく人の声のようにひびいた。よく咳をこらえる仕草で片手を口にもっていったが、そのくせ咳はなかなか出てこなかった。その動作なり恰好なりは漠とした印象を憶いうかべることができるのだが、どうしても父の顔はうかんでこない。いまぼくのもっている写真の、もっと若い頃の顔立ちを、記憶に残っているおぼろな姿恰好の映像にかさねてみても、どうもしっくりしないのだ。ただはっきり憶えているのは、その身辺にただよう一種の謐かさであった。それはむしろものうい感じ、だらしのない感じに近いもので、隠者とか科学者からうける謐かさとは丸きり性質を異にしたものである。苦痛もなく死んでゆこうとする病人が、ひょっとするとそんな雰囲気をかもしだすかも知れない。

そのくせ父は、調べものをするときとか書きものをするときには、子供心にも圧迫を感じさせる執念ぶかさを示した。居間に閉じこもって食事もとらなかったし、書庫のなかで幾十冊もの本をとっては開け、とっては開けしたりした。その姿は勤勉というより、なにか呪いをうけて自然にうごいている人のようにも窺われた。ぼくは未だに、父は好きこのんでああやっていたのではないと信じている。

父の部屋はちいさな日本間で、窓際に坐り机がおいてあった。そのうえで父は、原稿紙の桝のなかに、ばかに丸っこくちぢこんだ、几帳面な文字を並べるのだった。彼は毛筆を使ったが、墨をするとき必ずそれを斜めにすりへらした。開きはなしの本が周りにちらばって、どうかすると

父自身より本のほうが主人のように見えることがあった。

また何という本だったことだろう。家じゅうが本で埋っていたといっても、けっして言いすぎではあるまい。父はどんな種類の本でも蒐集する性だったので、客間の床の間まで本棚が占拠してしまっていた。いかめしい専門の本のあいだに、寄贈されてきた子供の読物だの婦人向きの本だのがまじっていたりした。だがなんといっても、居間のとなりが本たちの跋扈する世界で、十二畳敷ほどの天井の高いその部屋には、図書館の書庫そのままにぎっしりと本棚がならび、人はそのあいだを身をせばめて通らねばならなかった。それでも足りずに床のうえに積まれているものも随分あった。そのように厖大にあつまった本たちは、あきらかに自負心が強くなり、不遜になっているようだった。一冊一冊の本など、それがなんという本であるかということなど、ここでは問題にされなかった。ただ書籍というお面をつけて黙りこくり、読まれることなんぞ希んではいないらしかった。きっと人間がまったく顧みなくなったとしても、彼らはそんなことにはおかまいなく、倨傲にかたくなにしずまりかえって、塵にうもれながら積み重なっていたことだろう。

母の部屋とは異なった魅力が、ぼくをこの部屋に惹きつけた。階段をのぼると右手に母の部屋があり、左に小廊下をたどると書庫のドアにつきあたった。ノブが空まわりするため、ドアは一度で開くことは滅多になかったが、そうかと思うと、ノブをまわしもしないのに、すっとドアが開いたりした。いくらそっと踏みこんでも、床はおじけたように錆びた軌りをたてるのだった。すると部屋じゅうの本がきき耳をたてる気配がした。そして、どんな人間がはいってきたのかと、

うさん臭げな視線があつまるように思われた。実際、ぼくはすぐ横手の本棚の厚い辞典などがこちらを窺っているのを感じ、いそいでそちらに眼をやってみたものだ。けれども辞典はすぐに知らんふりをするらしかった。はじめの気まずい何秒かがすぎると、本たちはぼくにあきてしまい、もうこちらを警戒するようなことはなかった。ぼくは本棚のあいだをぼんやりとさまよい、また佇んでは、うっすらとたまっている埃に指の跡をつけた。それらの本たちにも、やはりぼくはそれぞれの顔をみた。赤色の、緑色の、あるいは総革の、あるいは仮綴の装幀と背文字が、いろいろな顔を形造っていた。しかしそれは、あの絨毯の顔と同様、注視すると消えてしまう顔であることに変りはなかった。

もうひとつ書き記しておきたい部屋に、玄関わきの応接間がある。非常に凝った造りで、優美というよりもなにかいかがわしい悪徳の匂いを感じさせた。壁はうすい桃色だったし、厚ぼったい窓掛も二重になっていて、無理強いの、人工の、ほとんど童話の魔法宮にちかかった。夜に燈りを消すと、純粋の暗黒が現出した。ぶ厚いカーテンは些細な星影さえもさしこませなかったから、その闇の濃さは怖ろしいばかりであった。

しかし煌々とともされた光の下で、母はこの室によく客をまねいた。そういうときの彼女の姿はひどく異国人めいて、たまにみえる外人の客よりも日本人ばなれして見えた。あちらでふたことみこと言葉をかわし、こちらで陽気に笑い声をあげ、常に座のあいだを動きながら、それでいていささかも優雅な感じを失わぬ母の姿を、ぼくは半ば感嘆し半ば満足しながら眺めていたもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だ。そしてひそかに空になったグラスに残っている赤い桜ん坊をつまんだりした。すると母は目ざとくそれを見つけ、まだ桜ん坊をつかんだままのぼくの手をおさえて、おどけた様子でぼくの頭を叩くのだった。みんなはそれを笑い、年老いた外人がわざわざ席を立って、ぼくに訳のわからぬ日本語で愛想をいったりした。しかしそんなとき、ぼくはとたんに萎縮してしまうのだった。それは、いてはならぬ場所に自分がいる感じ、間違ってこんな羽目に陥ってしまった羞恥であったにちがいない。ぼくはぎくしゃくとなり、できることだったら、そのまま消失してしまいたかったほどだ。

それでもぼくはそこに坐っていた。たとえ自分がのけものの存在であることがわかっても、やはりそのまま隅っこの椅子に坐っていた。そうしながら、客たちの談笑や硝子器のふれあう音を聞いているのは快かった。箱形のいかめしい蓄音機からながれてくる、けだるい、甘美な旋律に聴き惚れるのは快かった。母がレコードを取り代えると必ずその旋律がひびいてきたものだが、その音楽はなんだか異質の世界の呼声のようにも聴きとれた。ぼくはとおくから伝わってくる笛の音に耳を傾けながら、なじめない光景が、厚ぼったいカーテンや棚に並んだ木彫人形などの群が、ふいに自分に親しい身近なものとして融和してくるような錯覚にひたることができた。だがそれはほんの一瞬で、そんな気持は消えていってしまった。ぼくはぎこちなく身体をうごかし、そっと周囲の、自分と関わりのない談笑を窺うのだった。

だからぼくには姉がうらやましかった。二つ違いの姉は母の子供に似つかわしく、そのような雰囲気にすっぽりとはまりこんでしまうことができた。たとえ客の膝のうえに抱かれていても、

また片隅にぽつねんとぼくのように坐っていても、彼女はあきらかにぼくには手のとどかぬ世界に属していた。身体も魂もぼくとは別の材料でできているようだった。ときどき大人たちがテーブルを片寄せて踊るようなことがあると、彼女はすぐにその仲間になった。また客たちも喜んで相手になったのだ。ちょうど「あんよはお上手」のような恰好であったにしろ。

姉と同年の従兄が遊びにくると、二人はよくダンスの真似事をしてみせた。従兄は役者がうまかった。姉の手をとり、腰をかがめて挨拶をした。ひととおり踊りおえると、彼は上をむいて大声で笑った。姉も首をかしげてくすくす笑った。すると見ているぼくも間の抜けた笑い声をたてた。ぼくは常に観客だったのだ。それはぼくだって切ないほどやってみたいとは思っていたのだが、そのくせ誘われても首をふるばかりであった。自分にはああいうことはできっこないという確信のようなものがあったのかも知れない。

従兄が泊ってゆくことになると、かならず応接間で、ぼくたちの考えだした隠れん坊と鬼ごっこを合せたような遊びをした。魔法宮は完全な暗黒となり、つい鼻の先に相手がいてもわからなかったし、またぼくたちはみんな闇が怖ろしかったので、遊びというよりもっと真剣な、緊張しきった幾刻かが過されるのだった。

……どんなに目を瞠いても、見えるものはすべて均質の漆黒であった。その漆黒は目から遠慮なくながれこんできて、身体全体が闇と同じものになり、どこまでが自分の身体なのかわからなくなった。ぼくは椅子のかげにしゃがみこみながら、ときどき不安になって自分の手足にさわってみたりしたものだ。そのうちに、鬼がそろそろと近づいてくる気配がする。ときにはミシリと

いう音がしたりする。息づかいが闇を伝わってくるようで、こちらもそろりそろりと反対のほうにいざってゆくと、思いがけず相手の身体にぶつかってしまうこともある。それでもうまく逃げて、壁際に平たくなってしまうと、なかなか掴まるようなことはなかった。だが、ふいに闇のなかからの手が頬をかすめたり、あるいはこちらが鬼で、いい加減にだした手が相手の首すじにかかったりしたときの感触は、とても今となっては言いあらわせない。皮膚は極度にうすくなり、肉の感覚はすべて表面にあつまって、かすかな接触が全身をわななかした。それは単に掴まること掴まえることの感情だけでないにちがいなかった。あとでのべる銀白色の鱗粉からぼくのうけた感動にも近かったかも知れないし、あるいは人がはじめて燃えるような異性の肉を知ったときの心情にも通ずるものがあったかも知れない。

誰かが掴まって燈りがつけられると、姉はきまって隠れていた場所から首をのぞかせながら、「あーあ、こわかった！」と言った。掴まえられるとちいさな悲鳴をあげた。鬼になったときには常に音を立てたり笑ったりするので、どうしても相手を捉えることができず、そのため鬼を交替しなければならないこともあった。それに反して従兄が鬼になると遊戯はおそろしく真剣なものになった。彼は音というものを立てなかった。息さえもしないらしかった。じっと闇のなかで耳をこらしていて、どこかにひそんでいる相手の気配を嗅ぎだしては、じわじわと近よってきた。その恐怖に堪えられず、ぐったりとソファーのかげに坐りこんでしまうと、たちまち身体が闇に溶けこんでゆく錯覚をおぼえた。

また闇の重みというか動きというか、とにかくこの暗黒は昼間の空気なんぞと同じものではな

く、なにか生きた物質であることが感じとれることもあった。事実、闇はぼくの耳をこそばゆくおしつけたり、腕をそろそろと這い降りたりした。

＊

人は幼年期を、ごく単純なあどけない世界と考えがちだが、それは我々が逃れられぬ忘却という作用のためにほかならない。しかし、忘れるということの意味を、人は本当に考えてみたことがあるだろうか。なにか意味あって、人はそれらの心情を忘れさるのではなかろうか。

この物語は、むしろ忘却の生んだ物語である。すくなからぬ奇妙な発掘の結果なのだ。それにしても、追想というものはあくまでも、睡眠中に見ている夢と、目覚めて思いかえす夢との関係にたとえられよう。たとえば、はじめて幼な子の目にうつる外界の事象を、はじめて肌にふれるなじみのない外気を、表わしきれる文字がこの世にあるであろうか。

……一面に露がきらきらしていたから、まだ朝まだきのことであったろう。ぼくは女中につれられて広い原っぱを、雑草の生い茂ったなかを歩いていた。どの草も異様に背が高く、手足にふれてこぼれおちる露も酸漿くらいの大きさに感じられた。靄がかかっていて、空の光は夢像のようにぼんやりしていた。かぎりなくつづいている草の群は、しっとりと濡れて特有の香りを発散させ、その湿った空気を呼吸しながら、ぼくはなんともいえない、半ばけだるく半ばさわやかな快感を覚えた。言ってみれば、それはふしぎなみずみずしい性感のようなものであったかも知れない。それらの雑草の茎や葉には、露のために白い天幕のようになった蜘蛛の巣がかけられてい

たり、唾をなすりつけたような泡吹虫の分泌物がついていたりした。と思うと、こちらのぎざぎざした葉のうえには、虫けらとも思えぬほど変な恰好をした虫が蠢いていた。どんなにかそれらが珍しく目に映ったことだろう。ぼくはどれもこれも掴まえては、女中のもっている空びんに――茶褐色の不透明な硝子の空びんに投げいれた。なかでも、唾に似た白い泡を指でつついたところ、中から黒と赤の縞のある虫が這いだしたときの喜びはたとえようがなかった。隠れていた草の精を見つけたとぼくは思ったのだ。樹木や草に精のいることを、誰からきいた話であるかわからないが、すでにそのとき知っていたらしい。ぼくはそれらの貴重な宝物が一杯つまった空びんを、ときどきふりかえっては女中の手のなかに確めた。

家へかえってきて、玄関の石畳のうえでぼくは瓶を横にしてみたが、そのときの失望は大きかった。狭いびんの口から、細い肢をした草蜘蛛やカマキリの仔虫がぞろぞろ這いだしてきて、痛んだ肢をひきずって歩きまわった。だが、彼らは水気にみちた草原にいたときとは丸っきり違っていた。あの新鮮な、なまめかしい、生々とした気配は微塵ものこっていなかった。殊に一匹の灰色の蜘蛛がよろよろと足もとに這いよってきたとき、ぼくは慌てて退いたので、びんはごろごろと石畳のうえをころがった。するとその口から、あの草の精が、赤い縞に彩られた泡吹虫の幼虫が這いでてきた。その印象はぼくの不快をほとんど吹きけすほどあざやかだった。色彩に対する興味をぼくはこのときに覚えたようだ。

だがやがて、家から一町ほど離れたその原っぱは、ぼくにとって周知のものになっていった。折りとると黄いろの汁の滲みでる茎、関節のように節くれだった茎、柔毛の一杯生えた葉、触れ

ると針でさす葉、それらのものをぼくは区別したし、また叢はあくまでも草の茂りであり、そのかげから見知らぬものの窺っている気配も次第に少なくなった。それからさまざまの虫の形態も、心のどこかにしまってある形にすぎなくなった。

原っぱの隅には、崩れおちた煉瓦の建物の外郭がのこっていた。割れた赤煉瓦がそこここの土にうもれ、また灰白色の切石がひとところに散らばっていたりした。ぼくと姉は女中につれられて、よくそこでままごと遊びをしたものだ。石と石をすりあわせ、こまかい粉がたまると草の葉にのせて、「はい、どうぞ」とすすめるのであった。赤煉瓦の粉と灰白色の石の粉をうまく塩梅するのがむずかしかった。ときには黒土や赤土をまぜたりした。しかしぼくは赤煉瓦の粉をいつも多くいれすぎるのだったが、たしかに赤色はぼくの好みらしかった。

原っぱで赤いものは、なによりも夏の終りからあらわれる赤蜻蛉の群であった。秋もふかくなると腹部の色は真紅となった。彼らは原の上空をきらきらと羽をひからせて飛びかい、また墓地との境にある針金の柵にひとつらなりになってとまっていた。ぼくよりもずっと大きい子供たちが、網やもち竿で彼らを追いまわしていると、ぼくは女中の手をにぎりながら息をつめてそれを見ていた。どうか摑まらねばいいがと思った。それは嫉妬の念にちかい感情であったかも知れない。ぼく自身が彼らを捕えるためには、ぼくはあまりに小さくのろまであったのだ。

原っぱのはずれから寂寞とした墓地が無限にひろがっていた。それは、谷間をへだててとおく或る連隊の建築物がほの見える彼方まで陰気な樹海で埋めつくしている妖怪の跋扈する世界で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com